

出演 コーディネーター：おかげんた（芸人、アートプランナー、A-LAB アドバイザー）
蔡煜桐、笹崎凜、白井桜子、土屋咲瑛、丹生あさ、藤村明日香、吉田麻央
日時 令和6年6月8日（土）14時～16時
場所 A-LAB ROOM1

大学生活・作品について

おかげんたさん（以下：おか） みなさんこんにちは。吉本興業のおかげんたと申します。よろしくお願ひします。このA-LAB Artist Gate'24というのは、大学や大学院を卒業、修了した方や専門学校を卒業された方々に作品をA-LABで発表していただくという企画になっています。その選考方法は2つございまして、アドバイザーが卒業制作展の展示を参考に推薦する形と、一般公募の中から選出する形がございます。今回は7人のアーティストの方々が出展されていますので、これからお話を伺っていきたく思います。最初に学校がどういうところなのか。そして、展示作品がどういう作品なのかということをお話いただき、アーティストはどのような学校で勉強して、どのような流れで制作のコンセプトが出来上がっていき、どんな場所で作品を作っているのか。アーティストの方々の人間像と作品を楽しんでいただければと思います。最初は丹生さんです。よろしくお願ひします。
丹生あささん（以下：丹生） お願いします。
おか 大学はどちらでしょうか？
丹生 京都芸術大学の学部を卒業して、今年大学院を修了しました。
おか 画像には丹生さんの作品がありますね。
丹生 これは私の大学院時代の制作場所になります。



おかげんたさん



おか 何人かでシェアしているんですか？
丹生 そうです。大学院ではジャンルが幅広く、多領域の学生がいるので、学科によってこの部屋を院生が使っていいというのが決まっていますが、院生の人数に対して部屋数が少ないので、どうしても溢れてしまっています。
おか 学部時代はどうだったんですか？
丹生 染織の中で4回生の部屋という場所がありました。院に上がると染織学科の院生は3人だけでした。
おか 3人でシェアしていたということですか？
丹生 私は染織学科の全学年が一緒に使う捺染台という染める台が置いてある部屋の隅を使っていました。
おか そこでずっと制作をしていたんですか？
丹生 そうです。その部屋自体はすごく大きいんですけど、その隅を私は主に使っていたという感じで、部屋自体には常に学部生とか、他の院生が作業しているというような環境で制作していましたね。
おか イメージが変わりました。
丹生 学科によってもまちまちなので、染織とか立体造形の学生は空いた場所を見つけて、制作していますね。
おか ハングリー精神というか這い上がっていくような気持ちは沸々と湧いてきそうですね。
丹生 そうですね。逆に燃える感じはありました。場所が準備されていなくてもできるぞみたいな。

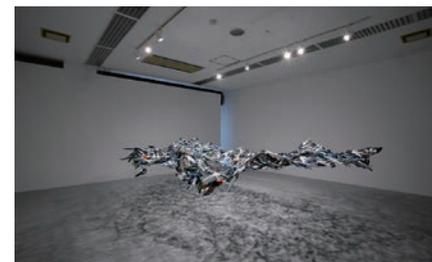


おか それはすごいですね。次に今回の展示作品についてお話をお願いします。
丹生 学部から大学院までずっと作品を制作してきて、一時期制作のコンセプトの部分で悩みすぎて、自分自身の中で作品を作る余裕がない、制作するためのエネルギーが出ないみたいな停滞する時期がありました。またそれがちょうどコロナウィルスの時期とも重なって。
おか コロナ禍でしたか。
丹生 コロナ禍と重なったりで、すごくもやもやしたものばかりが募っていて。でもずっともやもやしていても仕方がない。けど家から出るのも怖い。精神的にはそんな状態でした。そんな時に「ちょっと気晴らしに海に行こうよ。」って誘われて。少しでも気分が晴れるんじゃないかっていうことで海に行きました。私はその時期すごく沈んだ気持ちだったんですけど、沈んでいることは良くないことだと自分の中でもう思ってしまう。自分の普段の性格と、沈んでいるときの自分との違いに「沈んでいる場合じゃない。本当の私はそうじゃない。」みたいな。
おか 自問自答していたわけですね。
丹生 そうです。そのときに沈んでいる自分を否定的に捉えてしまっていることに気づいたんですね。息を大き



丹生あささん

く吸ったら浮くこともできるし、気を抜けば海の中に沈んでしまう。でも沈んでしまうことも海の中では当たり前で、ちょっとした変化だけで浮いたり沈んだりをしていられる場所であることを、海に行ったときにすごく感じました。そこから、この沈んでいることに対するネガティブな気持ちも少し考え方をただでネガティブに捉えなくてもいいんだなって。
おか 海から学んだんですね。
丹生 そうなんです。そこから海が自分にとって安心する場所、浮いても沈んでもどっちでもいいよって言われているような感じがすごく安心できて。この作品を作ったときは「安心できる場所」をコンセプトに制作をしました。
おか 浮いている形が水面的なイメージにも繋がっているのでしょうか？



丹生 そうですね。影を落とすということも関係しています。海の深部では果てしなく奥へ続いていくように感じますが、ある程度までは海の中にも光や影を感じられるので、その影を柔らかく感じられるような表現にしたいって、影も落とすようなインスタレーション作品として今回展示しています。
おか 人型になっていますよね。
丹生 そうです。全部人型ですね。
おか それは人がつながっているというイメージですか？
丹生 これは「海の写真」を調べたときに、リゾート地などで水着を着て、きれいな海に浮かんでいる人の写真がすごく出てきたんですが、その姿がまさに私が思う「心地良さの象徴」でした。なので海に浮かんでいる人の形からトレースして、1つずつその形に切って作っています。
おか ある意味、自然体ですね。素材は何ですか？
丹生 素材は、全て海の写真を転写した生地です。



おか 海の写真を転写している？

丹生 はい。生地から作っています。海といっても人によってそのイメージは全然違うので、自分が見た海の写真だけではなく、知人などから200枚ほど海の写真を送っていただきました。

おか すごい量ですね。

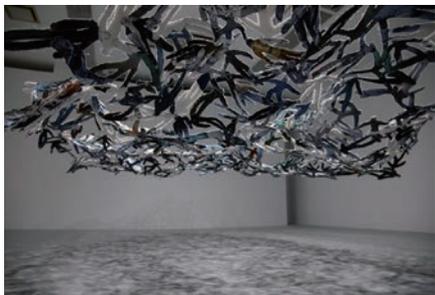
丹生 みなさんから送られてきた海の写真は、砂浜と海があったりとか、山と海が写っていたりする一部分なので、そういうところから海の部分だけを切り抜いてパターンを構成して生地に転写しています。生地だけど、これは海ですって言えるようなものにしたいたいながら構成しつつ人型を切り抜いて作っています。

おか 面白い作品ですね。大きさはどれくらいですか？

丹生 3m×4mぐらいはあります。

おか 卒展のときにこの作品は展示しましたか？

丹生 展示したんですけど、卒展のときに私がゲットできた個室が、作品に対して少し狭かったので、今の展示ではすごく穏やかな波の様子で吊っているんですけど、卒展の時はもっと荒々しい感じの波のような吊り方することで空間に綺麗に収まるように調整して展示しましたね。



おか こういう展示ができる機会ってあまりないと思いますが、いかがでしたか？

丹生 自分の中ではベストでしたね。

おか この部屋はご自身ご希望されたのですか？

丹生 最初は担当の方にこの部屋が合うと思います。と言ってもらっていたんです。

おか 私もそう思います。

丹生 ただ全部の人型が上を向いて寝転がって海に浮いている様子なので、同じような体勢で作品を見てもらえるような展示もしてみたいなとずっと思っていました。そう考えると和室が良いかもしれないということもあったんですけど、最終的にはサイズ感も考えて、ROOM3の方がいいなと自分でも思いました。

おか 影が非常に美しいですね。素晴らしいお話でした。ありがとうございます。続いては藤村さんです。よろしくお祈りします。

藤村明日香さん(以下:藤村) お願いします。

おか 藤村さんの大学はどちらですか？

藤村 私は学部も大学院も京都精華大学です。

おか 大学での専攻は？

藤村 染織なので丹生さんと同じですね。

おか では画像をお願いします。これはどういったものですか？



藤村 これは私が刺繍をやっというかと決めたきっかけになった作品で、服じゃなくて壁につけるブローチをイメージしています。これはコロナ禍に制作したもので、「曖昧」というタイトルです。毎日感情の起伏がなく終わっていく。誰とも喋ることなく授業の時間がきたら淡々とZoomを開いて授業を聞いて。家でずっと勉強するそんな生活だったので、良くも悪くもすごく感情が平らな時期がありました。その中で作品を作らないといけないってなったとき

に何も浮かばなくて、自分の中で変化があると、それを作品の題材にしやすいと思うんですね。でも本当にずっと家の中にいるので変化がない。でも今のこの気持ちもなかなか得ようと思って得られるものではないなと思って。刺繍って手元の作業じゃないですか。どれも手のひらに載るぐらい小さくて、そういう小さいものをこつこつ作っていく。そういう刺繍の素朴さとか繊細さみたいな部分が表現方法としてぴったり合っていたんです。刺繍は下絵が要らないので自分が思ったところに針を差したら、それが1つの線になって、その先もまたこつこついいかなってどんどん変えていける。染織専攻ですけど、織りも染めも自分に合わなかったんですね。

おか 合わなかったですか？

藤村 私がやりたいことはこれじゃないなって。どっちも面白さは分かったんですけど、ただ何かもやもやする。

おか しっくりこなかったんですね。

藤村 そうです。何でかなって考えたときに私の場合は下絵を描くのがとにかく苦手だったので。染織って型紙とかをきちんと決めておかないといけない。

おか そうですよね、必要になりますよね。

藤村 同じ下絵を何回も描いて、それが織りのときもあったり、切っていくときもあったりするけど、でも織りにしても全体像は最初に決めないといけない。一回織ってしまったら、変えることができないというのが自分にとってプレッシャーだったんだなと思って。

おか 刺繍の方がフリーな感じで合っていたんですね。

藤村 そうですね。そのことに気づいた作品がこれです。

おか 刺繍って、趣味でする場合があるじゃないですか。趣味でやる場合と制作では違うものですか？

藤村 これを制作しているときに先生からも「手芸みた



藤村明日香さん

いにならないようにしなさい。」って言われましたね。

おか その違って何でしょうね。

藤村 私も分からなくて。趣味で編み物とかをやったことがなかったの、どういう違いがあるのかなとは思いました。私の作品は刺繍はしているんですけど、素材の一部に紙があったりとか、貝殻を縫いつけていたりとか、着物の帯の布を端切れで買ってきて、それをくっつけていたりとか。刺繍だけじゃない、他の要素も組み合わせられてきたものだから、そういう意味では単なる刺繍とは違うのかもしれない。

おか いわゆる刺繍よりも、「表現」が前面に出ているものですね。刺繍という行為をやっているというイメージではなく。表現の過程の中でこのようなものが生まれた。大体いくつぐらい作ったんですか？

藤村 これはもっと小さいサイズも入れたら数えられないです。何個ぐらい作ったやろ？

おか 1日で1つぐらいできるんですか？

藤村 何か調子が良いときは1日で2つ作ったり。でも、できないときに1週間あってもいいです。

おか 丹生さんが横で大きく頷いていますけど、染織は、そういうものなんですか？

藤村 制作時間に対して出てくる量がすごく少ないので、調子の良いときの進み具合はよく分かります。

おか 次の画像は何でしょうか？



藤村 これはドローイングの作品で、紙だったり布だったりに置いてあるものはペニヤ板です。大学3年生の時に表現方法を模索していて、ずっとドローイングをしていた時期で、紙があったらとりあえず描く。みたいな感じで、修行のようにたくさん描き続ける時期がありました。

おか 刺繍からドローイングにいったんですね。

藤村 そうです。刺繍から線に興味を湧きました。もっと自由に描くとなったら、ペンだとキャップを開けたらもう描けるじゃないですか。何か染料を準備したりとかしなくていいし、自分がパッと思いついた瞬間に手を動かしたらどうなるんだろうという興味もあってドローイングをしていた時期がありました。

おか 刺繍とドローイングという共通点があって、あの表現になるんですね。次の画像をお願いします。



藤村 これは私が作品形態を絵画に決めたきっかけの作品です。このときは刺繍をした布を板に貼りつけたりしています。今はキャンバスになったんですけど、これに絵の具の要素が加わって、今の形になりました。

おか キャンバスに縫いつけていく形になったのは、自分の中でどういう変化がありましたか？

藤村 刺繍は自分にめちゃくちゃ近いもので、即興的に作っていくという感じだったんですけど、キャンバスを縫おうって思ったときにキャンバスって硬いから、穴を開けようと思って結構力が入るんですよ。簡単には失敗できないので、書き初めのような気持ちでやるんです。絵の具なら、塗ったら良いし、何か違うと思ったら上から色を重ねたりして変えていけるんですけど、でもそのめちゃくちゃ自由な絵の具の上に、自分が今から糸を入れていくつ

ていう作業が自分の中の強い意志みたいなものを表すのにしっくりくるなと思いました。

おか 緩和があって緊張があるようですね。

藤村 まさにおっしゃるとおりです。

おか それが何年生のときですか？

藤村 4年生のときですね。

おか 4年かけてそういうしっくりくるものを見つけたのはよかったですね。

藤村 そうですね。でもドローイングをしたりとか木を拾ってきたりして染織の枠組に入り切らないようなことをしていたので、先生達には片足だけでも突っ込んでいてねとか言われましたね。

おか 自分ではその気持ちでやっていたんですか？

藤村 はいって言いながらまた気になるものがあるとそっちに行くので、結構自由にやっていたですね。

おか 自由ですね。では次の画像を見せてください。



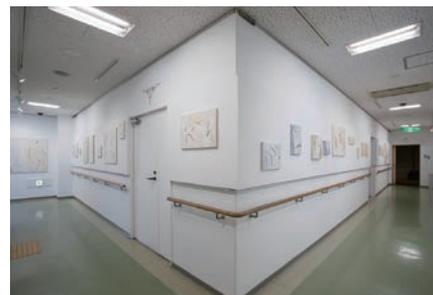
藤村 ここは制作のスペースで、この壁は衝立みたいになっているんですけど、この奥のところが院生の部屋になっていて、その部屋を3~4人で共有します。この壁は私が勝手に使い始めてとりあえず置いたらいつの間にか私のスペースになって、ずっと使っていた壁です。

おか 場所の取り合いみたいな感じですね。

藤村 でも私はすごく恵まれていたので、院生の部屋も一人ずつ結構広いスペースが与えられていた上で、他の壁も使わせてもらっていたので、丹生さんの話を聞いて大学が違うとやっぱり環境も違うんだなと思いました。

おか 面白いですね。それでは作品も。A-LABでの展示

も壁に同じように展示をしています。これは卒展の時の作品ですか？



藤村 この中心の境目から左側が卒展の作品で、右側は卒展が終わって今回出展することが決まってから制作した別のシリーズになっています。

おか 卒展で展示をすること、この Artist Gateに出展することで気持ちの切り替えみたいなものや違いのようなものって何かありますか？

藤村 卒業制作が、中尊寺金色堂をテーマにしている、今回新しく制作したものはイタリアです。全然違うんですけど、どちらもすぐ行きたいって思っていたけどなかなか行くことのできなかった場所なんですね。

おか 金色堂は昨年に行かれたんですか？

藤村 そうです。

おか イタリアは卒業旅行ですか？

藤村 3月のちょうど卒業した時に行きました。

おか 気持ち的にも全然違いますよね。

藤村 違いますね。

おか 作品として何か違う点はあるですか？

藤村 イタリアの作品は現地で購入した画材も使っています。日本とは全然違うラメの絵の具があったりとか、すごい大きな刷毛とか新しい画材を手に入れて作ったから、その画材の違いが作品にも表れていると思います。

おか 今回何点ぐらい展示していますか？結構数がありますよね。

藤村 結構ありますね。26点ぐらいあったと思います。

おか これだけの点数を展示するのは初めてですか？

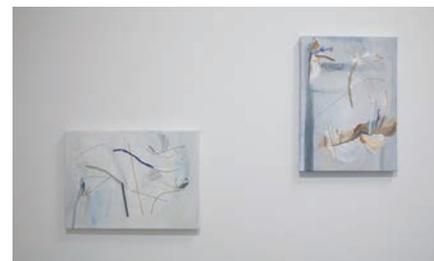
藤村 個展で展示しました。それまでは一つの作品だけを見て完成したなとか思っていたんですけど、個展では

一つの空間を意識して制作しないといけないんだとか、どうやって展示するかとか全体が目に向くようになりました。

おか 今回のA-LABに関して同様に展示を構成したということですか？

藤村 そうですね。ざっと展示はしているんですけど、一般的に絵画を展示しようと思うと中心線に沿って全部同じような高さで展示すると思うんですけど、私はあえてそれはしたくなくて、ちょっと高いところだったり、低いものがあったりします。展示スペースが長い廊下なので歩いて見るじゃないですか。人の視線もどンドン移っていくので、高さに幅を出すことで、私の旅の記録なので、そのときの感情の起伏も意識しています。

おか 作品の高低差でそれも一つ表現しているんですね。一つ一つの作品、例えばイタリア。これはどこをイメージしているとかあるんですか？



藤村 あります。この絵は、「着陸」というタイトルですけど、イタリアに向かう途中トランジットで、ドバイを経由したんです。夜中にドバイに着いたんですけど、飛行機のモニターで着陸するときの映像を見て。そのときの映像がモチーフです。その着陸したときの滑走路とか光とか、そのときの画面を表現した作品になっています。

おか なるほど。こちらは何でしょうか？



藤村 これはポーロニヤです。ポーロニヤは赤レンガ造りの街で、日本なら外壁は白い壁が多いと思いますが、ポーロニヤは赤茶色の建物で囲まれていて、ちょうど夕焼けの時間帯だったんですけど、赤茶色の街にオレンジ色の光が差して、すごく柔らかな街に見えて。その赤茶色のイメージを何とか使いたと思って、現地で買った赤茶色っぽいラメの絵の具を使って作った作品です。

おか 面白いですね。大きな作品もあれば小品もあって。ありがとうございました。

藤村 ありがとうございます。

おか 続いては吉田さんよろしくをお願いします。

吉田麻央さん（以下：吉田） よろしくをお願いします。

おか どちらの大学を卒業されましたか？

吉田 京都精華大学です。藤村さんと一緒です。

おか 画像を見ていきたいと思います。これは？



吉田 私は学部も大学院も精華大学ですけど、院生になってから全然作れなくて。それまではひたすら楽しく作っていて、その勢いで院に行ったんですけど、大学院になってから言葉で発表したりとか自分の中でまとめたり、それを人に伝えるみたいなところで、ここを説明できないとこれを作れないみたいな自分の中で勝手にすごいギューってなって、何もできない期間が秋ぐらいまでありました。

おか 結構長い期間ですよ。

吉田 はい。作ってはいるけど、しっくりは来ていなくて。陶芸の教室がある建物の外が、秋になると落ち葉でいっぱいになるんです。もう山盛りに。用務員さんがお掃除

する前のいっぱい落ち葉が積もっているところに、大学院の先輩のお姉さんとか一緒にほうきを持って行って、掃除をするふりをして逆にザザーって、走り抜けたりして遊んだりしていました。その後はちゃん掃除もして。そういうことをして自分が今制作ができなくてギューってなっている気持ちを発散させていました。

おか 気晴らしをして、開放的に自分の気持ちを明るくしていたんですね。

吉田 しんどかったなって思うけど、意外と楽しそうにしているのがこれでした。

おか 楽しそうではありますよね。これは展示ですか？



吉田 院の2年生になって初めて個展をしたんです。スランプも何とか抜け出しかけている頃で。

おか これは大学内ですか？

吉田 大学は京都市の北の方にあるんですけど、四条烏丸に大学のサテライトスペースの『kara-S』という場所



吉田麻央さん

があって、そのギャラリーを借りて初めて個展をしたときです。もうあとちょっとで始まるのにまだ全然並べきれていない、どうしようのときの写真です。

おか 呆然としている状態ですか？

吉田 はい。焦ってとりあえず箱から全部出したけど、どこに置くかはまだ決めてない場面ですね。

おか 個展はやってみてどうでしたか？

吉田 個展がすごい良かったんです。

おか 評判が良かったですか？

吉田 思っていた以上に評判も良くて、多くの人に来てもらえて。この場所が美術に興味がある人だけが来るような、美術館とかギャラリーだけがある場所ではなくて、隣には映画館があったりするので、年配の方から小さいお子さんまで、何だろう？って入ってきてくれて。このときが物の名前を先に考えるような作品作りを初めてした展示でした。それまでは形を作るときに先に何か言葉を決めることはなくて、作った後に決めていたんですけど、スランプの間に言葉を先に決めたら意外と膨らんでいくんじゃないかなど考えていて。

おか そこからイメージしていくものということですね。例えば、どういった作品名のものがあったんですか？

吉田 『ふくれたさいふ』とか、『はんこうきのフライパン』とか。物の名前とその状態を表す言葉を組み合わせて、何々の何々っていうのをいっぱい自分の中で考えていました。

おか 大喜利みたいですね。

吉田 ちょっと大喜利っぽく考えたら、どんどん作りたいう形というイメージが湧いてきました。

おか それは面白いんですね。自分の中でもヒントになるんですね。続いての画像は何でしょうか？

吉田 作業場です。大学に電気窯とガス窯があって、ガス窯を焚くときはガスの調整のために夜通し泊まり込みで窯を焚かないといけなくて。そのときに大体みんな窯場で寝泊まりして交代しながら窯を見ていたりするんですけど、最後に焼くとき、ガス窯の方が大きいものが入るので、私の大きめの作品はどうしてもそれで焼かないといけなくて、一人で見ないといけないうちに、冬は窯場は寒いので。



おか ストープありますからね。あれ寝袋？

吉田 そうです。教室に四角い椅子を低めに横にして並べた上に、卒業していった人が置いていった畳を一畳パンって載せて、その上に寝袋を敷いて寝てみたら、すごくよく眠れたっていう。一番よく寝ることができた泊まり込みだった時の写真です。

おか この寝袋が一番眠れたんですね。続いての写真は、展示ですか？

吉田 そうです。修了展の時です。



おか 頭に被っていますね。

吉田 はい。お子さんが来てくれた時にお母さんたちが「優しくね」とか「気をつけてね」とか言いながら、みんななどんどん触っていつてくれている写真です。

おか このまま作品の話にいきましょうか。普段はロビーとして使っている場所に作品がたくさんあります。私も先ほど作品を拝見しましたが「触れます」って書いてあるんですね。



吉田 修了制作で何を作ろうかなって考えたときに、私は自分で粘土を焼いて立体物を作っていますが、焼きものを見る人は触ろうと思ったら緊張もするし、そもそも触れないことが多かったりすると思うのですが、私はすごく触ってみたいと思うんですね。他の人の作品を見ている。それはやっぱり目で見ていただけじゃなくて「触る」ということが私の中で大切に。だから自分が作った形を触ってもらえたらという想いがあるのですが、「触る」ということと「見る」ということを両立させることはすごく難しくもあって。それをなるべく自分の今できる形でやってみたいということで、動作を伴う道具をテーマにしています。でもその目的は大したことなく、あごを置くだけとか。
おか ちょうどちらっと見えていますが、モニターがあるんですね。そのモニターでは作品にあごを置いている様子であるとか実際に使っている様子が流れています。これがあることによって、来られた方が同じようにやってみたりできますよね。職員の方にお聞きすると、小さいお子さんがタコみたいな作品を頭に被ったりしていたみたいです。

吉田 ただ置いてあるだけだと、手に取って触るには、少しハードルが高いかなということを修了展のときに思って。その時も触ってもらいやすいようにって考えて、この映像を作ったり、イラストを描いて表示していたりもしたんです。本当は私が考えた機能以外にも、それぞれに考えてもらうのも面白いなという想いがあったので、修了展の時は大きいモニターで見せていたんですけど、今回は小さめのモニターにしました。

おか 自転車のハンドルみたいな作品もあって、それもす

ごく気持ち良くて、触っていると気持ちいいですね。

吉田 そうです。やっぱり粘土は焼いたら硬くなっちゃうので形が決まっちゃうんですけど、でも、もともと持っている優しさとか柔らかさみたいなものが残るような形を作るのが好きで。やっぱりそれは見ているだけじゃなくて、人に触ってもらうことでより伝わるかなと思っています。

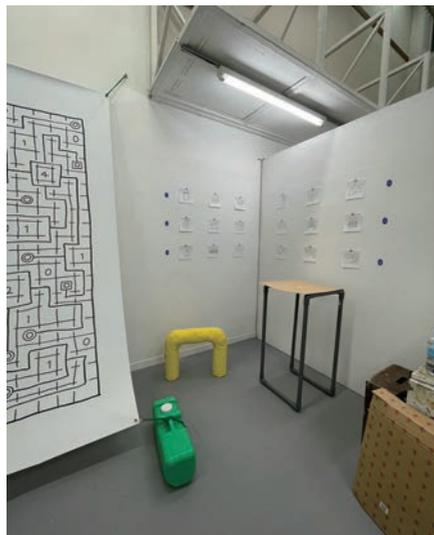
おか 絵の具をちょっと塗ったことによってワンポイントになって、それがすごく愛らしく見えますね。ありがとうございました。続いて土屋さんですね。

土屋咲瑛さん (以下:土屋) よろしくお願ひします。

おか お待たせいたしました。土屋さんの大学は？

土屋 京都市立芸術大学の大学院を3月に修了しました。油画専攻です。

おか 油画専攻ですね。この画像は？



土屋 ここは大学院1年生の時の作業場で、年度末に修了制作や進級制作を展示する展覧会があるんですけど、これは前展と違って、夏休み前に一回、自分達のスペースをオープンアトリエのような感じでお見せしている展示の様子です。

おか こういうのはやっぱりこの間、気合も入ったりするんですか？

土屋 そうですね。締め切りがあるからやらないとみた

いな感じにはなりませんね。

おか いろいろな方が見に来られるんですか？

土屋 そうですね。大学移転前の旧校舎に入れる最後のタイミングだったので、その校舎を見たいということもあって、たくさんの方が来られていました。

おか なるほど。次の画像は？



土屋 これは大学の移転が完全に済んだ後に校舎に入れるタイミングがありまして。移転前は廊下なんてめちゃくちゃ汚くて、キャンバスがもうばたばたに入ってるみたいな感じだったんですけど、それがもう全部無くなって、がらんとした状態でした。

おか 照明もついてなくて、自然光だけやから余計にノスタルジックというか。学生さん達もなかなか見られない風景ですね。

土屋 そうですね。

おか これは油画の近くの廊下ですか？

土屋 そうですね、左が油画で右が日本画の部屋ですね。

おか かなり奥までありますよね？

土屋 ここは結構長い廊下なので、ここに物が無いっていうことにめちゃくちゃすごいなって思って。物がある時の写真も持って来たら良かったんですけどね。

おか 本当に物だらけだったんですね。続いては？

土屋 新しい校舎に移転してそんなに様子は変わって



ないんですけど、移転前の制作スペースは天井が低くて大きなものを展示できなかったんですけど、一番左のものがエントランスに展示しているターボリンで、3m50cmの作品を制作スペースで展示できるようになりました。

おか 3m50cmもあるんですね。タイトルは？

土屋 タイトルは《回路プラスチック》です。数独とかナンプレとかってあるじゃないですか。そういうパズルのルールをオリジナルで作った上で、その絵を描くという作品です。タイトルも自分で作った造語です。

おか これは3つとも違うんですか？

土屋 そうです。ルールは同じですけど、別の問題を作って並べているという感じですね。

おか この大きさもあって、すごい見栄えしますよね。

土屋 そこを意識して作ったところもあります。

おか 最初からこのサイズですか？

土屋 最初は1m×2mとかで作っていたんですけど、これは団地とか郊外の住宅地を歩いているときの虚無感のようなものに興味があって、それを自分の作品で再現したいなと考えていました。いわゆるUR団地の白くてつるつるとしためちゃくちゃでかいものがいっぱいあるみたいな。その存在への憧れがあったので、憧れているならもっとでかく白くしなきゃだめだと思って、可能な限り大き

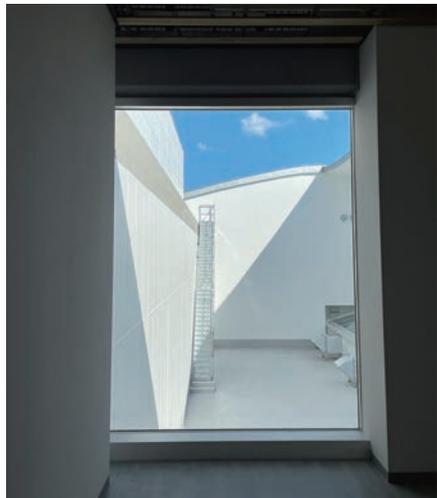


土屋咲瑛さん

く並べて見栄えがするようなサイズで考えたらこのサイズになりました。

おか 続いての画像は何でしょうか？

土屋 これは新しい校舎の油画の院生が使う部屋から見える謎の空間です。



おか 何か続いているように見えますけど、外には出られないんですか？

土屋 ここは出られないです。ただ見えるだけの窓で、ここに入りたいて言ったら、屋上に直接繋がっているみたいでちょっと危ないらしくて、そう簡単に入ることはできません。

おか そう簡単には？

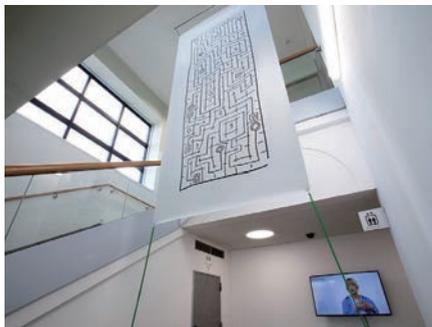
土屋 そうです。ものすごく強い意志があって、これがやりたいんですって言ったら入れるのかもしれないですけど、ふらっと行くのはだめですって言われました。

おか 1枚のキャンバス作品のようにも見えますね。

土屋 ここすごくかっこいいんですね。3Dモデルみたいな雰囲気もしています。

おか かっこいいです。さて今回展示している作品になります。こちらの作品の説明をよろしくをお願いします。

土屋 先ほど少しお話をしましたが、その3つ並べていた展示の形式で修了制作はご覧いただけるようにしていたので、今回エントランスに吊るすということで結構見え



方が変わって、そびえ立っている感じがより強くなって、ここに吊るして良かったなと思いました。

おか これは下から見上げるような感じですかね。

土屋 そうですね。みなさん入って最初に見るのがこの作品だと思うので、意味も分からず、なんじゃこりゃ？みたいに思ってもらえそうだなと。

おか この作品は何かイメージがあったりするんですか？

土屋 自分で問題を作っているのでも、最終的にどういう線が出来上がるかということも考えながら作っています。まさに描画しているような感じで、今回は左側や右下などに意識的に四角い塊が出来るようにした上で、そこから線が出てくるみたいなどころから、水道管とか水道メーターからパイプが出ているようなイメージを何となく連想してもらえたらいいかなみたいなことを考えながら作っています。

おか 都市そのものの空間であるとか、その中の仕組みみたいなものが一つのヒントになっているのでしょうか？

土屋 何となくあのエッセンスを取り込みたいなと思いつながらそういう形を描いたりとかはよくします。

おか 倉庫の展示室には、ドローイングが展示されていますが、こちらはこういった作品ですか？

土屋 もともと散歩している時に見た景色とか雰囲気や再現したいというところからパズルを大きく引き伸ばしたものとかを作るようになったんですけど、パズルを大きく引き伸ばしたものだけを見て、人は散歩のことだと思えないじゃないですか。遠くに行き過ぎたなと思っていて、今回新しくもう一度展示するとなったときに、そこをつなぐような何が描いているのか分かりそうなものを間に入

れたいなと思いました。右側にオレンジがバチッと入っているドローイングがあるんですけど、あれはマンションの前にある小さな公園のような場所の絵を描いたりしています。奥には網戸を素材に使ったものもあって、みなさんが見たときに何となく住宅のこととか、その馴染みのある日本の街中を想起してもらえそうなものを置きたいなと思ってこれらを置いています。

おか 広い意味でのランドスケープですね。文字が帯状にずっと続いているものがありますが、あれはどういったものですか？



土屋 これはテブラですね。文字を簡単に印刷できるテープですけど、最初は好きだから使いたいな、取り込みたいたいという思いでした。テブラのテープって人間味と無機質な感じが同居しているなって私は何となく思っていて、人間がせっせと打ってそれがビョーッと出てきて、伝えたい思いがあつてファイルに貼ったりすると思います。けどちょっとかくかくしてるし、ピクセルがちょっと見えたり、何か不気味な感じが同居してるなという風に思っています。私は作品で、こういう街の風景はこういう風になってとか、なぜこういう感覚があるのかとか、めっちゃくちゃ考えていることをすごく伝えたいと思うんです。だけど伝えたい反面、何言ってるんだ、こいつ。みたいな疎通のとれない部分も面白くなって欲しいなというのも少しあります。

おか これは不思議な作品でしたね。

土屋 そういう性質がテブラにあるかなと思って、テブラを使うようになりました。

おか これがポツンとあつたので面白いなと思いました。言葉の表現でもありますよね。

土屋 そうですね。

おか この作品があるから今回の展示に到達したという



ところですよ。

土屋 そうですね。視線のイメージでもあります。ものが発している気配みたいなものが、自分のところまで届いてくるような。

おか その部分がパズルにも共通しているなと思いました。倉庫の展示室をお使いになってどうでしたか？

土屋 A-LABには以前から展示を観に来ていて面白いなと思っていました。倉庫の部屋も木製の階段とか、ちょっと出ているパイプとか見て、こりゃ格好いいと思っていました。絶対公民館だっただろうみたいな廊下の感じとかも。

おか そのとおりです。

土屋 そういうA-LABの公民館だった部分が倉庫にかなり出ているなと思ってたので、倉庫は展示してみたいなとずっと思っていました。

おか 実現したんですね。

土屋 嬉しかったです。本当は左側のところも壁が通常時はあるみたいなんですけど、「外せませよ」って言っていただいたので、是非外してください。パイプがむき出しになるようにしてもらったりとかして、すごく楽しんで場所の要素を拾いながら制作できたなと思います。

おか お話を聞いていると、全体がパズルのような考え方でですね。

土屋 そうですね。

おか お話を聞いていても、それが全面的に伝わってくるというか、この倉庫のお話を聞いていても、楽しみながら制作をされているなという印象を受けました。



土屋 場所の要素を拾ったりとか、その場所のものや自分が持っていた手元にあるもの共通点とかを使ったり。一つ簡単なところだと、エントランスに作品を吊らせてもらっていますが、エントランスのターボリンの向かいに、凹凸レンズのようなガラスの窓があって、右側には大きな窓があって素敵だなんて思っていたんですね。それを思いながら倉庫を出入りしたら、正面の壁と右側の壁が倉庫から出るときに見えるなんて思って、それをイメージして、窓の絵を2枚貼っています。階段を降りて帰るときに見えと思うんですけど、その窓の形とリンクさせようかなみたいなことを考えました。

おか 楽しんでますね。これ自体が一つの大きなインスタレーションですね。

土屋 すごく楽しかったです。

おか よく分かりました。ありがとうございました。

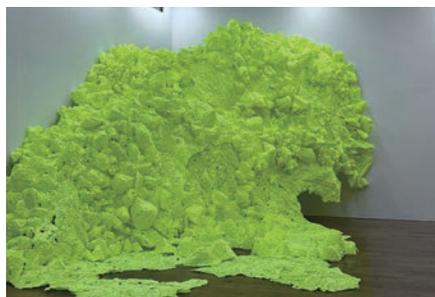
土屋 ありがとうございました。

おか 続いて白井さんです。

白井桜子さん(以下:白井) お願いします。京都芸術大学の学部を卒業して、同大学の大学院に進学しました。

おか 院生ですね。

白井 はい。油画です。



おか それでは画像をお願いします。これは大学の展示ですか？

白井 学部の卒業制作の作品で、今回展示している作品より一回り大きいものです。

おか どれぐらいの大きさがあるんですか？

白井 高さ3m、横幅4mぐらいありますね。

おか 素材は何ですか？

白井 これは市販されている化学繊維で、もともとつるんとしている生地なんですけど、裏からヒートガンで熱を加えてしわを寄せて、それを切って縫っての作業をひたすら繰り返してこの形になっています。

おか これは制作場所も広さが必要そうですね。

白井 この展示場所が私の制作場所でした。

おか だからこれぐらいの大きなものでも制作できるんですね。中はどうなっているんですか？

白井 木材と針金で基礎を作っていて、その上から被せています。針金を格子状に組んでその上に載せられるように頑丈な格子を作っています。右下の部分は浮いているんですけど、そこは針金をカットしてあえて浮かせた状態にして、作品に軽さが出るように制作しています。

おか この見た目でいうと目に刺さるような色彩とどろどろなテクスチャがすごく印象に残りますが、もともと表現されているものは心象風景なのか、こういったものを表現されているんですか？

白井 今回展示している作品にも共通しているのですが、私の祖母が影響しています。祖母と鳥取砂丘に旅行をしたことが作品のベースにあるので、この作品も砂丘から《dune》とつけています。砂丘ってドシッと構えているようなイメージがあるけど、布と色で軽さを出して、相反す



白井桜子さん

るようなものを作ったんですね。またこの作品の右側には蛍光ピンクの平面作品を置いているんです。空間の中でハレーションを起こす。この空間に入ると、ずっとは見ていられないんです。目がやられてしまって。見てはられないけど、強制的に目に入るような、そんな状況を作りたいなと思って。卒業制作でこの空間を作って、今回につながってきました。

おか 確かにずっとは見ていられないですね。ご自身で作っていて目は大丈夫ですか？

白井 サングラスをつけて作業していました。

おか 溶接作業みたいですね。続いては？



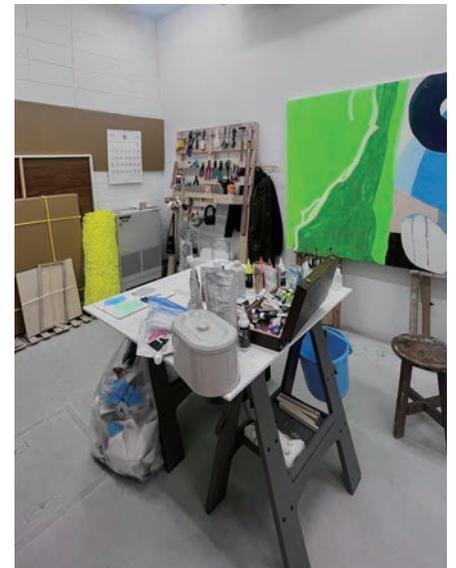
白井 ひたすら制作をしていると、修行のようで辛くてしんどいことがあります。そういうときに大学のいろいろな場所に猫がいるので、猫に餌付けをして触らせてもらって癒されるというのが、最近のルーティンです。学部的时候は友達とかみんなで気分転換に山登りをして農園とかで野菜を見たりして楽しかったんですけど、最近は一人でひたすら制作をするので、辛いときは猫に癒されるというのをやっています。

おか 猫に癒されてまた制作に取り組んでいくわけですね。続いての画像は？

白井 これが今の制作場所です。私はDIYが好きで奥に映っているいろいろな作業道具をかけている台とかを作ったりしています。

おか ペンチとかそういう工具ですか？

白井 そうです。ペンチとかタッカーとかいろいろのものをかけています。その空間を自分の好きなベストな状態にもっていくというのが気持ち良くて。今、大学院の制作場所を与えられてそういうものを作ったりしています。



おか ありがとうございます。それでは続いて、A-LABで展示している作品をご覧いただきたいと思います。和室の部屋ですね。

白井 そうですね。すごく凹凸があるんですけど、卒業のときは、他に展示している人もいるので照明を極端に変えるということができなくて。ずっとこういうことをやりたいなとは思っていたんですけどなかなか機会がなかったもので、今回和室を使わせていただけるということで暗室の状態にしてみました。



おか さっきのお話ではずっと見ていられないという話もありましたけど、暗室にして見せ方を変えるとちょっと和らいで見えますね。

白井 そうですね。この黄緑とピンクの刺激的なものとの和室の温かい雰囲気を組み合わせてみるとどうなるのか、実験的な試みを今回させていただきます。

おか 大きさや形もいろいろありますが、配置の部分についてはどのように考えられたのでしょうか？

白井 全体として構成したいなと思ったので位置などはすぐ考えました。卒展のときは、砂丘をイメージしましたが、今回のタイトルは《untitled》にしています。鍾乳洞みたいな大きなものにも見えるし、手で持てるような鉱石のようにも感じられる。それかもっと何か小さい手元にあるものが大きくなったような感覚が生まれたらいいなと。全体として構成したその中に鑑賞者が入ることによって、一つの作品が出来上がるようなイメージです。

おか 観る人によっていろいろなイメージが湧いてくる作品で、さらに和室というところが、展示室の中でもある意味異質な場所なので、部屋に入っていくとこれが目に入ってくるというのがある意味衝撃ですね。ドーンと来る感じですね。瞬間の衝撃といましようか。それが観ていざっと続いているという感じですね。今回の展示をして何か自分の中でプラスになったことはありましたか？



白井 今は大学院で全然違った制作をしているんですけど、これが学部からの延長でインスタレーションをやっている、今は平面を楽しくやっているので、空間を構成することと平面を構成することを今までずっと別ものとして考えていたんですけど、平面にしたときにつながっているところがあることに気づいたというか。今回のようなこままで一つの空間を自分の作品で埋めるということがなかったので、それがこれから生きてきそうだなと思います。

おか また次のステージへという感じですね。ありがとうございました。続いては笹崎さんです。お願いします。

笹崎凜さん（以下：笹崎） よろしくお願ひします。

おか お待たせしました。まずは大学はどちらでしょうか。

笹崎 京都精華大学の版画専攻を卒業して、同大学の大学院に通っています。

おか 版画専攻ですね。これは？

笹崎 これは版画の制作中の様子です。版画は版さえてきれば、何回でも刷って何枚でも量産できるという特徴がありますが、自分がしているのはモノタイプという一発で終わりの版画です。アクリル板に綿棒で油性絵の具を使って描いています。



おか これは何年生のときですか？

笹崎 3~4年生ぐらいですね。次の画像は同じ版をプレ



ス機で刷った完成形です。

おか こうなるんですね。

笹崎 煮干しの頭を描きました。

おか 煮干しの頭。それは興味があったんですか？

笹崎 お婆ちゃんがよく甘辛く煮た煮干しを作ってくれていて。頭だけもぎって置いとくんですね。多分使わなから。それがすごいびかびかしてきれいで。そこから煮干しの頭を描いていますね。

おか 周りに煮干しの頭をモチーフにしている人っていないんじゃないですか？

笹崎 どうでしょう？魚とか煮干しが好きな人も多い気はしますけどね。

おか 続いては？

笹崎 これはドローイングですね。



おか 右にはクワガタかな。文章も書いていますね。

笹崎 文字が書いてあります。こういう作品が多いです。「屋はもこもこの山肌を撫でる。夜は山の境界線をなぞる」って書いて、写真を貼ったりとか。

おか この作品の形になったのは、何年生のときですか？

笹崎 4年生ですね。



笹崎凜さん

おか 煮干しの頭やクワガタとかいろいろモチーフが登場して面白いですね。上に山みたいな線があって、ちょっと絵日記的なイメージも感じられますが、そういうイメージもありますか？

笹崎 そんな感じかもしれないです。思ったことをちょろちょろと描いて。

おか 右上にも切り抜いた山がありますが、あれは夜の風景ですか？

笹崎 そうですね。屋の山って山肌が全部見えるじゃないですか。屋はその山肌を目で撫でる感じ。夜は山の境界線がくっきり出るので、その境界線を目でなぞる感じがするなって思ったんです。

おか 全部共通してつながっているんですね。クワガタが出てきたのは、クワガタを捕まえたとか？

笹崎 クワガタ好きやなくて。

おか 満面の笑顔ですね。クワガタ好きなんですね。クワガタの横のあれは何ですか？

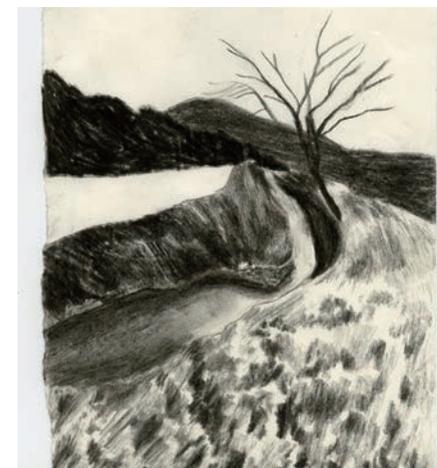
笹崎 多分山肌を描きたかったけど、上手くいかなかったです。

おか バランス的にも面白いですね。続いては？

笹崎 これもドローイングで、お気に入りの川を描いた作品です。

おか これは実際にある川ですか？

笹崎 実際にある川です。



おか 木があって山があって。山がよく出てきますね。
 笹崎 山は多いですね。川が奥にあったり。
 おか こういう曲線のある景観に惹かれていたりするんでしょうか？
 笹崎 好きなんだと思います。
 おか これはどこがモチーフになっているんですか？
 笹崎 これは家と大学の間の川なんですけど、全部がモコモコしているんですよ。川沿いにある草とかも。それがお気に入りです。
 おか 面白いです。続いては？



笹崎 これもモノタイプの版画ですね。
 おか これはご自身ですか？
 笹崎 自分を投影して描いています。自分で書いている小説の一文を抜き出して絵に起こしています。
 おか 挿絵みたいなものですか？
 笹崎 そんな感じで描きました。
 おか これ可愛らしいですね、横になって何か良い夢を見ていそうですね。それでは笹崎さんの今回の展示作品ですが、どのような作品かご説明をお願いいたします。
 笹崎 4本の柱が立っていて、これは自分の家族だと思って作っています。この4本の細い柱がお母さんであったり、おばあちゃんであったり。女系家族なので女性特有の不

安定な部分もあったりしますが、絶対に折れない女性の強さもある。そういう中で育ってきたことが、自身のアイデンティティだと思っています。その奥に寝転がっているでかくて太い柱がお父さんです。
 おか お父さんは倒れているんですか？

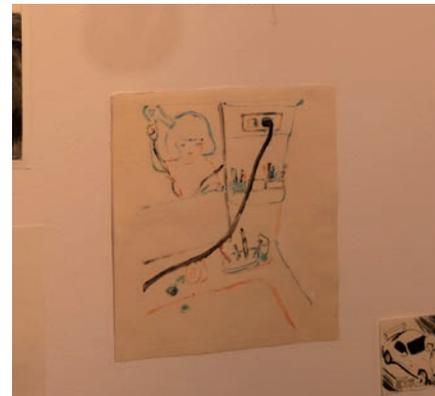


笹崎 お父さんは、この支え合いに参加せずに寝転がっているんです。一番立派なものにも関わらず。
 おか 大黒柱が寝転がっている。
 笹崎 そうです。
 おか やっぱ女系家族だから。
 笹崎 何もせず。
 おか 真ん中にいる人はご自身ですか？
 笹崎 あれが自分で、寝転がっているお父さんを見ているんです。



おか 確かに見えていますよね。その奥にあるドローイングの数々はさっき言っていた小説に関係しているものでしょうか？
 笹崎 そうですね。主に自分のことを書き出したもので、作品自体も自分のことを書いているものです。
 おか 私小説ということですね。これは卒業展で展示も拝

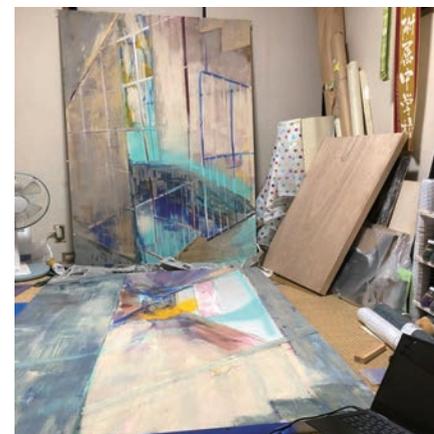
見しましたけど、新作も追加されているんですか？
 笹崎 ちょっとだけ追加していますね。
 おか 今回の展示のために？
 笹崎 そうですね。
 おか これは何をしているところですか？



笹崎 これは3月に、お母さんが事実婚していたお父さんが急に亡くなって。久しぶりに実家に帰って、お葬式とかでバタバタしているときに家で一人きりの時間があったんですけど、お風呂上がりドライヤーをしていて、洗面所にある歯ブラシを見て、この歯ブラシの並びを見るのも最後かもと思ったときのものです。
 おか すごく意味のあるドローイングですね。ある意味、家族を象徴したものですよね。
 笹崎 そうかもしれないですね。
 おか よく分かりました。ありがとうございました。続いて最後は蔡さんです。
 蔡燈桐さん（以下：蔡） 私は京都市立芸術大学の日本画を卒業した後、京都コンピューター学院を今年卒業し



蔡燈桐さん



ました。
 おか この画像はどちらですか？
 蔡 これは自宅です。京芸のとき、初めての個展に向けた制作風景です。そのとき大学が夏休みだったので、全部の絵を自宅に運んで、学校の風景を描きました。
 おか 奥にあるのが作品ですか？
 蔡 そうですね。両方とも学校の風景です。さっき土屋さんが見せていた廊下の景色だったり。
 おか なるほど。
 蔡 この時は大学が移転する1年ぐらい前ですね。学校の好きなところを記録したいと思い描きました。
 おか 続いては。
 蔡 これは大学の私のスペースです。



おか みんなで使っている場所ですか？
 蔡 そうですね。大体8人ぐらいです。写真の右側に立

てかけている絵は、今展示している作品の制作途中です。

おか この作品はどれぐらい制作日数がかかりますか？

蔡 1ヶ月ぐらいです。日本画の材料は乾燥に時間がかかるので、このときは6枚同時進行で制作しました。

おか それは大変ですね。続いては？

蔡 寝袋です。

おか 魚の寝袋ですか？



蔡 サメです。これは卒業制作展の頃で、毎日とても忙しくて朝から大学が閉まるまでずっとここにいました。冬はとても寒いので、ずっと寝袋はありました。普段制作するときは、寝袋に足元だけ入れて、足元だけ魚のようになっていました。

おか 夜遅くまで制作をしていたんですね。

蔡 この周りは全部制作用のスケッチとか絵があります。

おか こういう環境で制作しているんですね。よく分かり



ました。続いては？

蔡 これは専門学校の京都コンピュータ学院に行っていた時で、コマ撮りアニメーションの授業の写真です。

おか 左側にあるものが原画ですか？

蔡 そうです。実家のペットとお婆さんです。

おか かわいらしいですね。犬と猫ですか？

蔡 そうです。猫は14歳になりました。犬は10歳になって長い時間ずっと一緒にいる家族です。

おか いろいろな思い出もあるわけですね。続いては、作品の話にいきましょ。う話を聞かせてください。

蔡 今回大事にしたのは、自分の「感覚」。辛いときや体に痛みがあるときを記録しました。

おか これは心臓ですか？



蔡 そうです。心臓がモチーフになっています。

おか 心臓に何かついていませんか？

蔡 それは樹脂です。今、立体の作品に興味があるので、樹脂とFRP材料で立体の作品を作っていて、樹脂と日本画が組み合わせたら面白いとか考えて。

おか 次の画像は？

蔡 これは京芸の風景です。

おか え？

蔡 これは、人の心の奥の燃えているところで、いろいろな京芸での記憶は、もう京芸が移転するから多分みんな頭の中の記憶もだんだん消えるなどと考えて、その感じを描きました。

おか 中に目のようなものがありますか？

蔡 ニワトリです。日本画では、2年生のときにニワトリの写生があります。大学にニワトリが何羽かいます。

おか なるほど、じゃあこれはトサカだったんですね。ありがとうございました。素晴らしい作品です。



ターニングポイント

おか 続いては、どのようなことがターニングポイントになっているのかお聞きしてみたいと思います。それでは丹生さん、藤村さん、吉田さん、一斉に出していただきましょ。まず丹生さんは「不調」ということですが、これはどういうことでしょうか？

丹生 今、展示している作品もそうですけど、私が作品を作るときは大体自分の身体とか精神的に不調のときに作ることで、どうにかその不調を乗り越えようとしていることが多いです。なので常に不調ってすごく嫌な感じだけど、それを嫌にしないために作品制作をしているところがあります。なのでいつも不調が起こると何か次につながっているなどと思います。



おか 不調が次につながる。不調になれば、次のステージへ向かうわけですか。

丹生 望んでいるわけではないですけど、そうなっていますね。

おか それがターニングポイントになっているのは面白いですね。続いては藤村さん。「母」ですか？

藤村 5年前に母が亡くなったんですけど、闘病生活を送っていて、私も看病をしていました。親が母しくない家庭だったので、親がいない状態でこの5年ぐらいを過ごしています。私にとって母は友達に近いような存在でした。ただ病気になってからは、母が子どものような感覚もあって、自分が守ってあげないといけないとか、自分が母の力になってあげないとみえない。親という存在だけど、いろいろな感情を彼女に対して持っていて、その存在と切り離されたけど、自分はまだ生きている。一心同体のような存在だったのに、自分の片方が無くなってもう片方は生きているような。自分は何も変わっていないんですけど、どこかに大切なものを置いてきたような感覚。ある意味で後遺症のようなものをずっと抱えて過ごしていて、それがどうしても制作に影響しているなど思っています。今回旅をテーマにしていますが、それは自分にとってかなり珍しいことで、これまでずっと死生観をテーマにしていました。心であるとか思想や哲学的なことを考えて制作していたので、いきなり旅をテーマにして周囲にも驚かれました。ただイタリアには教会がたくさんあって、その教会や中尊寺のお寺というような祈りの場所に自分はずごく惹かれて、その作品がメインになっています。そういうことを含めて、やっぱり母の存在はずっと自分の中であって、制作の中心にあるんだなって思っています。

おか 制作の背景もよく分かりました。ありがとうございます。続いて吉田さんは、「長生き」。どういうことですか？

吉田 ターニングポイントというのか、いつも意識したいなって思ったことです。大学院でスランプになったときに、自分は結局何をを目指したいのか悩んでいたところで、私は普段緊張しやすかったり、ちょっとしたことを重く捉えてしまったりして、自分で自分を勝手に縛ったりすることが多くて。それでお腹が痛くなったり、頭が痛くなったり。でももしかしたら全然そう見えない人でもそういうところ

があるかもしれない。自分が作るものはそういうところから解放していくもので、緊張とか不安を知らないようなものだから、自分自身もそうだし、周りの人や作品を見てくれる人も解放されて心身ともに「長生き」であると思いたいと思っています。

おか 作品から感じられる心地良さが、心の置きどころでもあるんですね。ありがとうございます。それでは土屋さん、白井さん、笹崎さん、蔡さん、一斉に出していただきますよ。土屋さんは「誤読」。どういうことでしょうか？
土屋 街とかを散歩をしているときに自分の存在感が薄くなる、自分の身体があることを忘れるような瞬間があります。それが心地良いなと思っていて、自分の目だけが存在しているような状態を作品を通じて説明したいと思っています。考えたイメージは、空間に網目がプワーって走っていて、人がいたりとかモノがあったりとか、視線があったり気配があったりすると、その網みたいなものがそこから中心にパーッと揺れてきて、例えば、今いるこの空間は人がたくさんいるからめっちゃ網が揺れてるけど、私が散歩してる時とかはその気配の残り香みたいなものがうっすらと網を揺らしてそれが自分のところまで到達してきて、それが通り抜けていって、自分の背中が薄くなるようなコンセプト、世界感があって。なので今回展示している作品の中にも網がいっぱいあったりとか、テブラとかはその視線とか気配をイメージしています。私がなぜこのようなことを考えたかという点、『生きられたニュータウン - 未来空間の哲学 -』という、ニュータウンにある特有の気配がなぜあるのかということについて考えた本があったんですね。その中で提示されていた考え方に、ハンナ・アーレントという人が考えた「網の目」という考え方があって。私はそれを見て「あー、ここに網がプワー



てはっして、それが揺れるんだな」と納得して感動したんです。けど、1、2年ぐらい経ってよくよく読み返してみたら間違っていて。多分そうじゃないですね。ポイントが無数にあって、そのポイントが線でつながれたものを網と多分呼んでいるんですけど、私は空間にプワーって網があると思ってたのになって。

おか 解釈が違ってたんですね。

土屋 でも、私はそういう整然としたものがブレているのにも興味があるなと思って。まっすぐにしようとしているのにできないみたいな。そういう要素も私がいなくなって思ってるモノの気配の根源にあるなと思ってたから、「誤読」でも良いじゃん。その誤ったことが自分の納得につながったのも可愛いじゃんと思って、その作品の愛すべき部分かなと思ってのそういう「誤読」です。

おか 今のお話で展示されている作品がより理解できた気がします。ありがとうございます。続いて白井さん。「ダブルスクール」？

白井 2年生から3年生にかけて専門学校と大学に通ってました。私は油画に入ったんですけど、絵を描くことにそこまで興味を持ってなくて。でも無理矢理筆を持ってたりとか、アクリル絵の具や油絵の具を使ったりしてみました。でも私が小さい頃から興味があったのは服とか布とかビーズとかそういうもので。高校を卒業するときに私はそのファッションの方へ行くということを全く考えていなくて。自然な流れで油画に行っただけなんです。それは小学校のときに油絵の具をやっていただけなんですけど。そこで一度ファッションのことをちゃんと勉強してみようということで、ファッションの専門学校に入学して、ずっと筆を持ってチューブから絵の具を出して描いているけど、わざわざ自分がやりにくいことをやっているなと自分で思って、じゃあもう布にしまえばいいんじゃないかって思って。最初アクリル絵の具をパネルに流し込んで、上からヒートガンで熱を加えてしわを寄せる作品を作っていたんですけど、それを布にしてみたらいいんじゃないかって思ったのが、ファッションの専門学校を卒業した頃です。

おか 発想の転換ですね。ダブルスクールの経験があったからこそ、今の作品に辿り着いて、次のステージへ向かうことができたということですね。

白井 そうですね。今はまた布で自分が心地良くやっていたことを、どうやって平面に戻すかということをやっています。ずっと繰り返しやっていますね。

おか ありがとうございます。笹崎さんお願いします。「腸」？



笹崎 1、2年生までは、何となく好きなもの、煮干しとかもそうですけど、何となく好きなものを描いていたんですけど、そろそろコンセプトを固めて人に説明できるような作品を作らないといけないなと思ったときに、何となく好きだと思っていた腸がモチーフとして浮かんできました。

おか 腸が好きなんですか？

笹崎 腸が好きで、何で好きなんだろう？と思ったときに、そういえば大学の入試で腸を作っていたとか、4歳のときにヘルニアになって脱腸してたとか思い出して。現在とつながったなと思って、そこから自分の過去に紐付けて作品を作るようになりました。

おか ありがとうございます。続いては蔡さん。「ゴールデンウィーク」ですか？

蔡 日本に来て、京都での生活が始まって初めてのゴールデンウィークに虫歯ができてしまいました。とても痛くて、病院に行きたくても病院はどこも休診でした。すごく我慢してゴールデンウィークが終わり、やっと治療してもらいました。その時の虫歯の痛みを無駄にしなかったのが、虫歯をモチーフにした作品制作を始めました。また今年のゴールデンウィークは、39度の高熱が出たんですけど、そういうときの考え方がすごく変わりました。「神様ありがとうございます。新しい作品のモチーフができました。」って思います。どうして病院は休診してるんですか？

おか ゴールデンウィークは大体休みが多いですね。蔡さんのご出身は、中国ですか？

蔡 中国です。

おか 連休は、旧正月ですか？

蔡 あります。でも、病院は全部開いています。

おか 分かりました、医師会に言うとききます。ありがとうございます。

アトリエにあるもの

おか 最後は、みなさんのアトリエや制作環境に置いているものを持ってきてもらいました。それでは丹生さん、藤村さん、吉田さんに出していただきますよ。まず丹生さんは何を持ってきましたか？

丹生 裁縫箱です。私はテキスタイルだったのでもずっと布を使って作品を作っていたんですが、普通の裁縫箱だと大きくて持ち運びが大変なので、知り合いにもらったこのお菓子の箱が頑丈で良くて。それをずっと使っています。

おか これはどれくらい使っているんですか？

丹生 4年くらいは使っていますね。

おか ものもちが良いですね。失くると焦るでしょう。

丹生 焦ります。これがなかったら、何も始められないのでまずこれを探さないといけません。

おか これまでに失くしたことはありましたか？

丹生 この糸切りバサミを失くしたことがあって。これまでいろいろなものを試したんですけど、この糸切りバサミにたどり着いて、関西でこの種類を取り扱っているお店が、神戸に1店舗あって、そこで買って使いました。これを失くした時が一番焦りました。

おか ありがとうございます。続いて藤村さんのアトリエにあるものは何でしょうか。阪神タイガースのTシャツ？



藤村 これは、阪神タイガースが昨年日本一になった記念のTシャツです。

おか 藤村さん。すごく嬉しそうな顔をしていますね。阪神ファンですか？

藤村 物心がついたときから阪神が好きで、阪神と共に生きてきました。

おか 優勝パレードは行きましたか？

藤村 行きました。神戸の方に行きました。

おか どうでしたか。パレードは？

藤村 私は選手よりも試合の方が興味があるので。

おか でも選手のファンの方とかもいますよね。

藤村 いまですけど、カッコいいとかすごいとかそういうことよりも、阪神が勝つことが一番なので、推しの選手でも不調なら2軍に落として欲しいって思います。

おか 厳しいですね。今年の阪神はどうですか？

藤村 打撃がちょっと弱いので苦しいなって感じですね。

おか 藤村さんがもし監督をやったら、今後の阪神はどうしていくべきでしょう？

藤村 初心にかえるべきやと思います。

おか ありがとうございます。続いて吉田さんです。

吉田 陶芸のお店で売っていた中で、一番私が使いやすいと思った道具です。

おか それで粘土をどうするんですか？

吉田 手が届かないところとか、すぼんだ形とかになったときや、ちゃんとくっつけたいとか流したいところに使います。陶芸の道具屋さんに行ったら、先端が違うヘラがいっぱいあるんですけど、この先が丸くなっているところが自分の指と近くて良いです。

おか しっくりくるんだ。



吉田 蛇みたいで可愛いので、目を描きました。

おか ちょっと笑えますね。それは目なんですね。

吉田 何かに見える形が好きだったりもするので。

おか ありがとうございます。それでは土屋さん、白井さん、笹崎さん、蔡さん、一斉に出していただきましょうか。土屋さん、これは？

土屋 これはテブラです。本当は展示に使っているボタンがついたテブラが一番可愛くて好きです。ポチポチ押してテープを出すテブラがビジュアル的には一番好きですけど、実用的にはこれがめちゃくちゃ良いです。これはスマホと接続して、専用のアプリで文字を入力したらテブラから印刷されます。ボタンがついているタイプは1mまでしかテープが出ないんですけど、これはもっと長く出すことができます。私は3mぐらい出したいので、3m分の文字を転送したら出してくれます。

おか 気持ち良さそうですね。

土屋 ハラハラします。間違っていたら終わりなので。

おか なるほど。1文字でも文字が間違っていたらもう一度作り直しなといけないのか。

土屋 途中で止められなくて。間違えたって気づいても、最後まで出てくるのを見ているしかないです。でも今の制作の方法だとこれは欠かせない存在ですね。

おか ありがとうございます。白井さん、お願いします。

白井 チュールです。猫を触ることが癒しだと言っていましたが、実はめっちゃ猫アレルギーです。

おか 猫アレルギー!?

白井 いつ反応が出るか、もうギリギリのところ調整していて。猫をいつか飼いたいからこの2年で抗体をつけて何とか飼えるようにしようとしています。



おか 今のところは大丈夫ですか？

白井 毛が生え変わる時期はちょっとやばいですけど、最近は大丈夫です。

おか 子どもの頃に猫を触ってアレルギーになったとか、反応が出たということですか？

白井 私は、毛がある動物が全部だめです。でも実家にいた犬は同じ空間にいても大丈夫だったんですけどね。

おか 触ったりしたらだめなんですかね。

白井 そうですね。粘膜に毛がつくと、反応が出ちゃうんですけど、反応が出ないようにならないかなーと思って、チュールをずっとポケットに入れてます。

おか ありがとうございます。笹崎さんは何でしょう。

笹崎 これは海で拾った石と貝殻です。私は生まれが奈良なので、海は憧れの場所です。海へ行く機会があって、念願の石拾いができて、それを全部置いています。

おか 石の魅力は何でしょう？

笹崎 海ならこの丸さですね。海で削られた丸い石。

おか 貝殻はどうですか？

笹崎 貝はぬれるとピカピカしてきれいです。裏とか特に。おか 海以外に河原とかにもあるじゃないですか。例えば鴨川の石はだめですか？

笹崎 鴨川でも拾って置いているんですけど、やっぱり川はゴツゴツしてますね。

おか 海のほうがさらっとしてる？

笹崎 海はやっぱり丸いですね。よく削られているので、触り心地が良いです。

おか 吉田さんの作品と共通しているところかもしれませんね。吉田さん！笹崎さんの石を触ったことありますか？ちょっと触ってみませんか？どれが一番オススメですか？

笹崎 これとこれ。これはやばいなあ…。

おか やばい…とは？さあ一つ目はどうですか？

吉田 ただ丸だけじゃなくて、ちょうど三角で手握ったときに、ピタッとはまるのが、気持ちいいと思ったり、温かくなるので…分かる！

笹崎 ですよ！

おか 二つ目が笹崎さんがやばいと言っていた石です。

吉田 やっぱり丸みって、意図的に丸くしたものと自然に出た丸みとはやっぱり違ってくるので、これはやっぱり…



あー！きた！この持ち方だ！こうです！

おか ということです。笹崎さん、ありがとうございます。お待たせしました、蔡さん。可愛いラバーダックですね。これは見ていると癒されたりするんですか？

蔡 普段は思っていることを喋りかけたりしています。

おか 喋る？

蔡 例えば新しい作品のアイデアが浮かんだら、「これはどうしようかな。これでいいかな？」って喋りかけます。ストレスがあつたり辛いときは、手で握りつぶしながら、「痛いですかー!」って感じて喋りかけます。

おか 作品と共通するところがありますね。

蔡 普段はストレス発散に使っています。「もとの形に戻ることできますか？すごいな、えらい子だね。」って、こういう感じで喋っています。

おか 使う頻度はどれぐらいですか？

蔡 作品制作のときはずっとですね。

おか 蔡さん、ありがとうございます。今回も素晴らしいアーティストの方々にお話を伺いました。ありがとうございました。

